

第2回渋谷区学校の在り方検討委員会 会議要旨

1 日時 令和2年7月28日(火) 10時00分～11時50分

2 場所 渋谷区役所 8階 814会議室

3 出席者

(委員) 14人出席

(事務局)

教育政策課長、学務課長、教育指導課長、生涯学習・スポーツ振興部長、地域学校支援課長、
教育センター所長、教育政策課教育庶務係・学校施設係職員

傍聴者 2名

議題

(1) 学校施設の目指すべき姿について

◆議事概要

(委員長)

○2名の傍聴希望者あり。委員会に傍聴の許可を諮った結果、異議がなかったので許可。

(事務局)

○現時点で14名の委員のうち、過半数を超える12名が出席しているため、会議は成立していることを報告。(2名遅参)

○第1回検討委員会会議録(案)について、あらかじめ各委員に確認していただいた会議録の確定版を机上に配布したことを報告。

(1) 学校施設の目指すべき姿について

(委員長)

諮問の一つとなっている学校施設の目指すべき姿についての資料と今後の審議スケジュールについて事務局より説明を求める。

(事務局)

○審議スケジュール、学校施設の目指すべき姿の審議ポイント、渋谷区のこれまでの取組や区内中学校の令和2年度「特色ある学校づくり」の状況、学校施設の複合化や共用集約化等に関する他自治体の先進的な取組事例を説明。

(委員長)

これから審議に入りたい。複数ポイントにまたがる場合もあると思うが、各委員から自由にご意見をいただきたい。まず副委員長の専門の立場から発言をお願いする。

(副委員長)

建築の立場からは、空間が変わらないと先生の働き方は変わりようがない。建築は一旦作ったら長期間使用されるので、50年といった先を読むと同時にフレキシブルな(柔軟で可変性のある)作り方をしないといけない。今節目の時期にあたっており、特に渋谷区ではインクルージョンやダイバーシティ等で頑張っている中で、複合化の問題が出てきているが、教育そのもの＝地域施設・コミュニティ施設というような役割がとて問われている。教育の方向性も含めた視点を持つ必要があるのではないかと感じた。

避難所については、多様な人が避難してくる中で、普通教室も特別教室も避難所対応しなくてはならない、共用トイレといったことも必要となってくる。教育施設整備の方向性が、区としての検討の中で問われている。

複合施設は地域コミュニティの強化につながるものであるが、運営するのが非常に難しい。ハードの面だがソフトあってこそ。

(委員長)

かなり先を見通した形で検討するという経験を踏まえた発言であった。

(委員)

先進国ではICTでのトレンドは、小中高校では1人1台のICTデバイスを持って、個々人にあった学習を行っているが、日本では遅れている。

ICTがあるからこそできることをどうするかが課題。渋谷区はハード面では世界のトップクラスだがソフト面に課題がある。生徒自身が先生になるなど、生徒に自発的にその場をリードさせるといったソフト面が日本の公立学校では課題となっている。

フリースペースの問題もある。決まった場所でなく、いつでもどこでも自由な空間で、一人で作業に集中したり、みんなでワークに取り組んだりといった、一人1台のデバイスの良い環境を生かし、ソフト(人材)を高める。

(委員)

渋谷区の基本理念の「ちがいをちからに」というところが一番の議論かと思っている。

子供たちが学びの主体、「学びを子供に取り戻す」ような考え方をしたい。個の価値観が認められて、多様性というのが出来上がっていく。個別学習室ということではなく一人一人が自分の学びに集中できる環境と、共同で学べるフリースペースのようなものもあるとよいのではないか。

ICTと掛け合わせられる特別教室が必要となってくる。子供たちが主導で、自分たちで発見していくようなICTの使い方が出来てくるのではないか。地域住民にも開放することで、一緒にものづくりができたり、若手起業家などの多様な人が入ってこれるようになるのではないかと思った。

(委員)

安全性では、開かれた学校であると誰でも学校に入れる環境になるが、セキュリティチェックを強化した方がよい。海外の学校では治安の面もあるが、入り口は1か所でIDを持っている人しか入れないようになっている。

(委員)

コロナ禍で感じたが、産官学が協働して、それぞれの役割を明確にすることが重要だと思った。

行政ができなくても民間のプロがいれば上手に協働できる。子供たちの知的・精神・身体・運動というのがバランスよく、ハードにしてもソフトにしても対面とICTを使って成長させられるようなシステムを作ることができるのではないか。

(委員)

「学校という建物を開く」ことによって、子供も学校だけでなくどこでも学べる、人的交流による人的サポートがあり、今まで手に入らなかったパワーが手に入る。

渋谷区の学校の施設を使うことで、母校とは違う感覚ができた時に、学校が開かれた状態となる。学校を開くということは、地域の人にとって、今までになかった関係が築かれていないといけない。

「教育」・「子供」はもちろん、「先生」にとっての新しい学校は何か。先生の仕事環境をよくすることも大事である。また「地域」にとっての新しい学校のありよう、「知のハブ」知の拠点としての学校などを考えた方がよい。

(委員)

避難所としての防災機能についても、建替えの時点から検討頂きたい。学校によっては、現状、避難所の本部となる部屋と区の本部との連絡機械や災害用の電話回線が離れていたりする。

(委員)

フリースペースや校庭、音楽室、美術室、工作室などいろいろなスペースを活用して、多様なことができるので、部屋の名前を変えることでがらりとイメージが変わる。

そのような部屋で育つと、子供は学校に思い入れを持ってきて、ともに育てる環境が生み出される。渋谷区は「校庭」や「音楽室」という名の部屋を作らない、フリーなスペースをつくとよい。

(委員長)

名もないスペースに関係者が名前をつけていくといったありようがあるのではないかと、文化があるのではないかと提案だった。

(委員)

学校はコミュニティスクールとして地域と共に歩むということで進んでいるが、その中で大切なのはスペースとスタッフだと感じている。帰属意識が強くあるが、そこから一歩出て、広く関わることできるようなスペースが非常に大事だと思う。

避難所の観点では、誰でも使いやすいように、EVや防災倉庫など現状を踏まえ、熟議を重ねることで改善に向けて進めることができる。

学校を開くということでも避難所ということでも防犯は大事であり、IDといったことも考えていく必要がある。

(委員)

現在はエレベータが設置されていない学校も避難所となっている。エレベータの必要性はとても感じている。

地域の人など様々な人が出入りして、子供たちにいろいろなことを教えてくださるといった体制ができています。

図書資料は全てバーコード化、電子化することで、オンラインでタブレットを用いて資料検索ができるようになる。自分の学校だけでなく、他校や区の図書館ともつながることができる。自分のタブレットで区の全ての資料を検索できるようになる、そういうシステムをぜひ作って欲しい。

(委員)

バリアフリーに関して、車椅子の子供が、エレベータがない関係で行動制限が発生し、教育活動がかぎられてしまうということがあった。

生徒数や学習形態など、さまざまな集団に応じたスペースに変えられることや、子供たちが教育活動を受けられる要件が広がるとよいと思う。

(委員)

L T Eを備えたタブレットは全国で渋谷だけが、児童・生徒と教員に配られている。さらに9月に現状のタブレットがリプレイスされる。

タブレットを配っただけではダメで、いかに活用して、工夫して生産性を高めるかが重要である。施設整備にあたっては、フリースペースといった問題もあるが、チューターやヘルプデスクの充実も必要となると感じている。I C T環境をいかに使うかについて、試行錯誤しながら、学び方につながっていくのではないかと。

(委員)

特にI C Tを推進しなければならないと感じた。特色ある学校づくりということで、中学校にいろいろな特色が付与されているところだが、I C Tと外国語教育は特色の1階部分、渋谷の学校のスタンダードにしなければならない。その上に理数やスポーツ・部活動などの2階部分を作っていかなければならない。

小学校の設置基準などにおいては、プールや運動場というのは学校になければならないということではない。学校に必要な要素は、教室と図書室、保健室、職員室。特に運動場やプールといったものは学校とは違う、一般の区民施設という位置づけをしていく学校が出てきてもよいのではないかと。学校が使うのが優先だが、それ以外は学校施設ではなく、一般施設として地域に開いていく学校があってもよいのではないかと。

(委員)

子供たちが複合化の犠牲にならないように考えていきたい。

いろいろな施設を複合化することについて、近隣にあるものを学校にやたらに入れていくことは、セキュリティの問題や人件費、維持費の他に、地域の人が中に何かあるのかわからなくなり、結果として使い勝手が悪くなる可能性が考えられる。

地域のマスタープランと絡めていき、学校の特色づくりと複合化を一緒に考えていけたらよい。子供たちが学校を選択するきっかけにもなる。そうした学校の文化を作っていくための複合化ができればいい。

セキュリティの部分は重要。区民が入るスペースと学校のスペースを、ゾーニングで物理的に分けたり、人の目が入るようなハードを整備することが必要となってくる。技術革新を活かしたセキュリティで、子供たちの健康状況や出席状況もデータ化することで、教員の業務負担の軽減にもつながる。

(委員)

保護者としての意見になるが、セキュリティ、安全面はたいへん大事である。一方で、位置情報や学校に行っているかもプライバシーと考える見方もあり、渋谷区でどこまで許容できるのかといった線引きを考える必要がある。ただし、もちろんITの良さは理解しているので、有効に活用できたらよい。

学校をオープンにしていく複合化は、いろいろな施設を入れるだけでなく、産官学の産業の部分をうまく使うことや、先生が学校の外に出て行って交流することも重要である。渋谷区にいろいろなリソースがあるが、企業にとっても渋谷区でこうした活動を行っているというのはPRにつながる。

(委員長)

渋谷区の独自性を生かした産官学のネットワークの重要性のご指摘であった。

(委員)

学校になかった機能を学校に入れるときに、「言語化」が大事である。どういう機能を手に入れると、どういう人材が入ってきて、どういったメリットが生まれるのか、何かと何かをつなげてどうなるのか、議論の時には、そうした言語化が大事である。

(委員長)

新たな学校施設をつくる時、理念があって、どういう哲学があり、どう区として表していくのか。地域住民や参加する大人にとって学びの場がどうあればよいのかというのをご提案いただいた。

複合化することによって生まれるメリットもあるだろう。先進的取組事例の資料で、幼保小が実際つながり、図書館・音楽スペースが広がることによって、子供の出会いが豊かになることが保証されるような空間となっている。

今後、デジタル空間とフィジカル空間をつなげると、どのような新たなありようが出てくるのか、議論を深めていきたい。建替えがその機会になってくる。

忌憚のない刺激的な議論ができたことをありがたく思うが、今回は時間の関係もあり、ここまでとする。

◆第3回検討委員会日程について

○次回の会議は、9月16日(水)10時からとする。

3 閉会

以上